

まずは世代の問題である。直接的に第二次世界大戦を体験している訳でもなければ、全共闘運動の真っ只中にいたわけでもない。その感覚は私たちの世代に非常に近いものがある。次に女性であるということ。如月はジェンダーという言葉自体は使ってはいないが、指摘していることは現代のジェンダーの問題に大きく関係している。そして3つ目に東京出身であるということ。私が日ごろよく聞く東京論は地方出身者が語る外部の目から見た東京である。しかし、如月は内側から自分がいる場所を見ている。地方出身者とは違い、比較すべき何かがあるわけではない。そこに存在しているからという理由だけで都市を記述し、表現していく。

そして、如月の都市を見つめていた目は1986年ごろから子どもと演劇に向けられるようになる。数々の子どもたちとのワークショップを行うことで、芸術と社会を結びつけていった。特に姫路の兵庫県立こどもの館でのワークショップ

は、はじめは大いなる実験であったが今も継承され前を進み続けている。

他者を求めること、それこそが如月は都市を見る中で行ってきたことである。如月が演劇、ワークショップ、数々の著作のなかで行ってきたことは、自分自身でもある都市の中で他者を求めることであったのだ。

東京という都市はたった一つの理論で語られるほど簡単な構造をしてはいない。どこか一カ所をとってこれが東京です、と言いきることはできない。しかし、どれをとっても東京である。いわばモザイク状の都市なのである。そんなモザイク状の都市である東京を知るためには東京を知る人、ひとりひとりの視点を借りて東京を再現していくより他に方法はないのではないだろうか。他人の経験を自分のものとして捉え、複合して東京らしきものを考えていくより他に、東京に近づく方法はないのかもしれない。

都市の空隙を埋めるアート活動と地域の活性化 — Central East Tokyo2005 を事例に —

玉 木 亜友美

東京の至る所で、使われなくなったオフィスビルや空き倉庫、空き店舗などが見られる。これらは、都市空間の変容の過程で発生してきたものだが、特に近年、丸の内や六本木などに代表される大開発の裏で、元気をなくし、そういった都市の空隙とも言える空間が問題となっている地域がある。

こんな中、既存ストックの有効活用という考えのもと、空きオフィスから住居へ、空き倉庫から各種施設へとといった様々な用途転換が見られるようになった。そういった、都市の中で空いてしまった空間の新たな活用法の一つとして、本論文ではギャラリースペースという用途に注目した。

空きビルなどを使ったアート活動は、町なかで行われることから、地域の活性化やまちづくりといった目的を持つことが多い。本論文で取り上げるのは、そういった空きビルを使ったアート活動とまちづくりが結びついたイベント、セントラルイーストトーキョー2005 (CET05)

である。このイベントは、かつて東京の中心だった場所、神田、日本橋、馬喰町といったエリアに散在する空きビルをギャラリー化するというイベントで、今年で3年目を迎えた。今回は、イベントの主な開催地である千代田区、特に神田エリアに注目した。神田は、神田明神に見られるような伝統や町会同士のつながりが残る一方で、かつての職人の町としての性格は廃れ、空きビルが目立つという問題を抱えている。

このイベントは、外から人を呼び寄せ、この地域を知ってもらい良い機会になったと同時に、空きビルの持つ新たな可能性を提案する「投げかけ」にもなった。また、アーティストは神田という場所や空きビルという空間に魅力を感じて参加し、自分の表現活動で生まれる思わぬ効果も楽しんでいった。一方で、物件のオーナーからの厳しい条件によってアーティストの表現活動に障害が出たり、地元の閉鎖的な性格やCETという運動の特徴から地元をうまく巻き込めなかったりといった問題が見えてきた。

CETの場合、その主宰者がデザイナーやディレクターや建築家といった、地元の人でもなければまちづくりを強く意識する人でもなく、アートや建築、文化といった立場からの実験的な性格が強い運動体であるので、完全に地元

に合ったイベントに作り変えていくことは難しいが、このイベントでこの地域に何か新しいものが芽吹いたのは確かだ。それを地域の活性化につなげていくためには、真に地元を巻き込み、続けていくことが重要である。

国連アジア本部設置による沖縄の可能性 —国連機関沖縄誘致推進センターの事例から

中 尾 安寿水

本論文は、現在政治家やNPO法人などが提唱している国連アジア本部沖縄設置における、沖縄の今後の可能性を考察する。

なぜアジア本部を設置する場所として沖縄が挙げられるのだろうか。それは、古くは琉球王国時代としての独立国家時代から、その後の薩摩藩の島津氏による侵略、明治政府による「琉球処分」、太平洋戦争において日本で唯一の地上戦となり、約二十万人もの被害を出した沖縄戦、そして、二十七年間に及ぶ米軍の統治という、様々な歴史の流れの中で芽生え、深く沖縄の人々の心に刻まれた平和を求める想いが、今後の世界の平和構築を担っていくであろう国連にふさわしいからであると言える。また、同じく強い平和の心をもつであろう被爆地である広島・長崎ではなく、なぜ沖縄なのかという点については、沖縄には現在でも根強く残る様々な問題があるからであると言えるだろう。沖縄県

人の平均所得は一九七二年の日本復帰後から常に最下位である。これには辺境の地であり海によって隔離された場所であるゆえに、産業が発達しなかつたことによる経済発展の遅れが見られる。また、今でも残る米軍基地により、基地で働き収入を得ている人、基地による地代で生活をしている人など、基地があるからゆえの依存経済の問題がある。よって、現在沖縄では、基地を反対する声は多いものの、基地がなくなることによって生活できなくなる人々がいることも事実である。この問題を解決する様々な政策や運動の中のひとつに、冒頭で述べた「沖縄にアジア太平洋国連本部を」という動きがある。

本論文では特にNPO法人国連機関沖縄誘致推進センターの活動に焦点を当て、団体の発起人である中谷靖氏の発言を参考にしながら、国連アジア本部の沖縄誘致の可能性について探っていく。

福都市生活における地下鉄の経験—小説を通じてみる東京の地下鉄

永 瀬 智 子

普段われわれが何気なく乗っている地下鉄であるが、その何気なさの中に不思議なことはたくさん転がっている。たとえば、電車の乗り間違えに代表される方向感覚の喪失であったり、乗換の仕方が駅環境に影響されたりなど、無意識のうちに我々が地下鉄に乗りながら経験していることは、地下鉄や地下空間特有のものによるためであると思われる。しかしこれ以上に、人間に不可思議な感覚を持たせたり、何かを想像させたりする要素がもっとあるのではないかと

と思い、それを探ることを卒業論文のテーマとした。

その上での主な分析の対象とするものは、アンケートではなく、もっと感覚的に訴えてくるものとして一冊の小説を選んだ。浅田次郎の『地下鉄（メトロ）に乗って』である。この小説では地下鉄という装置、そして地下という空間によって、登場人物が過去と現在を行ったり来たりする。現実では考えられないタイムスリップ、そしてワープであるが、作者がこのような